

地域に眠る埋もれた歴史シリーズ（別冊2）

茨城のちょっと面白い昔話



ふるさと“風”の会

まほらに吹く風に乗って
＜日本の美しい風景と歴史のプチディクショナリ＞

ふるさと風の文庫

茨城のちょっと面白い昔話

木村 進

ふるさと“風”の会

(1) 頭白上人伝説

(伝説1 飴を買う幽霊)

戦国時代の初め頃、現在の旧新治村（現土浦市）の筑波山麓付近に一軒の飴屋があった。

ある日のこと、夕方暗くなってきたので、店主は店じまいをすることにして戸を締めた。

すると、しばらくして誰か戸をたたいた。

店主が戸を開けると、髪の毛が乱れた一人の女が一文銭を差し出して、

「どうかこれで飴を売っていただけませんか？」

と悲しげな声で話してきた。

店主はもう店仕舞をした後なので断ろうとしたが、その姿や恰好を見て、どこことなくあわれに思っつて飴を売ってあげた。

女はお礼を言つてそのまま帰つて行つた。

また次の日も、その次の日も薄暗くなつてから女は一人で飴を買いにやつてきた。

そして6日目に

「もうこれしかお金を持つていませんので、これが最後です」

悲しそうに女はというと最後の飴を大事そうに持つて力なくとぼとぼと帰つて行つた。

店主は心配になり、そつと女の後をつけて行つた。

すると女は町はずれの墓地のあたりで消えてしまった。

店主は怖くなつて、恐る恐る墓地のほうに近づいていくとどこからともなく赤ん坊の泣き声が出た。

店主は村人を集めてきて墓地の赤ん坊の泣き声のする墓を掘り起こした。

すると、そこには女の亡骸とそのわきで飴をなめている赤ん坊が発見された。

この女はこの近くに住んでいて、臨月であつたが数日前に賊に襲われて殺されてしまひここに埋葬されたのでした。

墓の中で女は子供を産み、幽霊となって三途の渡り賃であった六文銭をもって子供に飴を買いにあらわれていたのです。

その時に生まれた赤ん坊は近くの寺に預けられて元気に育っていきました。

その後この赤ん坊は僧侶となり、全国各地で修業を重ね、天台宗の名高い高僧となった。生まれた時から頭の髪の毛が真っ白であったので「頭白上人」と呼ばれ、多くの人々に慕われた名僧になったのです。

(伝説2 生まれ変わって敵を倒す)

大同年間に空海(弘法大師)は筑波山の徳一法師が建立した知足院中禅寺を再興し、筑波山の鬼門方向(東北⇨丑寅)にあたる東海村に村松山虚空蔵堂(神宮寺)を建て等身座像(虚空蔵菩薩)を彫って安置しました。

その後この寺は戦国時代に常陸国を統一した源氏一族の佐竹氏の保護を受けて隆盛を極めていた。

しかし、文明十七年（一四八五）に佐竹氏と岩城氏との交戦の舞台となり、そのときの兵火で多くの堂宇が消失してしまい、その後しばらく荒廃が続ききました。その二年後にこの寺を再興したのが頭白上人であった。

そして寺の名前も村松山日高寺と改めたのです。

今でも最初の厄年が訪れる数え年の十三歳でお詣りする「十三詣り」が行われており、多くの参拝客があります。

時は戦国時代。常陸国では佐竹氏と小田氏が大きな勢力争いをしておりました。

頭白上人の生まれ故郷は筑波のふもとですから小田氏の領地に近い場所でした。

頭白上人は生まれ故郷のこの地（石崎）で村松山虚空蔵堂再興の29年後に、自分を生んでくれた母親（賊に殺され、幽霊となって子供を生んだ）を供養するために五輪塔を建立するとともに、千部経をあげて7日間供養を行いました。

そして、供養が終わった後、そこに集まった多くの村人たちに説法をしていた時です。小田城主が供を連れて鷹狩に馬で通りかかりました。

そして、この供養に集まっている人々を馬に乗ったままその人々を蹴散らし、無礼なふるまいの数々をしたのです。

それに怒った頭白上人は

「この大切な儀式を、馬も降りずに無礼なふるまい、断じて許すことはできない。礼を知らぬそなたらはこれから先ろくなことは起こらないであろう！」

と大声で言い放ったのです。

怒った小田の家臣たちは、そこに集まっていた人々を自分たちに敵対するものだといい切捨て皆殺しにしてしまいました。

頭白上人は悲嘆にくれ、それ以降、小田氏には憎悪の念を抱いて死んだといわれています。

さて、頭白上人が亡くなってしばらく経った天文十六年（一五四七）三月に、佐竹家では後に鬼将軍と言われた十八代当主となる義重が生まれました。

義重は生まれたときに頭白上人の形見の品を握り締めており、のちのち自らこの頭白

上人の生まれ変わりであると称していたとも言われています。

そして、宿敵の小田氏との戦いを繰り返し、ついに永禄十二年（一五六九）に手這坂の戦いで小田氏治に勝って小田城を奪取したのです。

さて、この頭白上人が母親の供養のために建立した五輪塔は今も土浦市の旧新治村に残されています。

場所は、筑波山の麓に、山肌がむき出しになっている採石場があり、そのすぐ隣に金嶽神社がありますが、その脇にこの大きな五輪塔が置かれています。

この五輪塔は、銘が刻まれているものとしては関東でも最大級の大きさで、春にはきれいな桜が彩りを添えています。

五輪塔は県指定の文化財であり、高さ三・六mの花崗岩製で、地輪に

「功德主 頭白上人 大工本郷 永正十二年 二月三日」
と刻まれている。永正十二年＝西暦一五一六年 である。